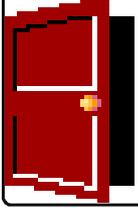


令和5年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

No.82

桑村小学校令和6年1月24日

文責 渡邊

一人一人の意見を大切にする授業改善を目指して!!

今回の読書通信は、『麴町中学校の型破り校長 非常識な教え』（工藤勇一著 SBクリエイティブ 2019年9月）の第三章『協調性・みんな仲良く』を疑う「多様性の本質とは？」から、小タイトル「多様な社会で生きていくスキルの身のつけ方」をもとに、授業について考えてみたいと思います。

対立が起きて当たり前だと理解してもらおうときに、並行して教えたいことが「感情コントロール」の必要性です。異質な人がいるとイライラするのは自然な反応です。否定したいし、できれば排除したくなります。でもそんな状態で意見の異なる人と話し合いをしてもお互い感情的になって対立が深まるだけ。

いま多くの企業がダイバーシティ経営を掲げて、多彩なバックグラウンドをもった人を採用し、チームづくりをしようとしています。いままでにない化学反応が起きて、新しい価値が生まれるのではないかという期待からでしょう。

しかし、現実の社会では、そこに放り込まれたメンバーが正しい対話の作法を知らないゆえに、価値を生むどころか対立が増えて生産性が下がる光景も見受けられます。

そこで麴町中学校では、みんなで何か決め事をするとき、ビジネスの代表的なフレームワークであるブレスト(ブレインストーミング)とKJ法を奨励しています。

ブレストとは、アイデアをひたすら出しまくって、付箋にどんどん書いていく「アイデア発散作業」。KJ法は出された大量のアイデアをカテゴリ分けしたり、相関関係を図式化したりしながらアイデアを「収束」させていく作業です。(中略)

ちなみに当校はロンドンにある中学校と交流があり、毎年10日間の短期交換留学を行います。そのアテンドでイギリスに行ったときに現地の先生にこの取組を説明したことがあります。すると「イギリスも同じだよ。日本もこういう教育をするんだね」と言われて少し意外に思いました。現地の授業風景を見ると、一斉授業スタイルなのにそこら中で手が挙がって各自が意見をしっかり言えるからです。

「日本は意見を引き出すためにブレストをわざわざやるけど、君たちの生徒のように臆せず意見が言えるならわざわざブレストをする必要があるのか」と聞いたところ、先生の回答は納得のいくものでした。

彼は言います。ロジックで相手に勝つディベート技術も必要だが、すべての話し合いがディベート形式になってしまうと、議論の目的が「いいアイデアを考える」ではなく、「反対意見を負かす」になってしまう。するとクラスで影響力の強い子どもや、ロジックが得意な子、押しの強い子が10対0で勝つような展開になりやすく、特定のアイデアだけが通ってしまいやすいそうです。

「これからの時代は多彩な意見を取り入れながら、アイデアを構築していく技術も重要なんだ。だからこそ、折に触れブレストをやっている」(P135～P139より引用)

本校では、既に職員研修で、学校長のリードのもとブレインストーミングとKJ法を取り入れ、その方法の良さを体感してきました。

今後は、それぞれの教師が自分たちの研修を生かした授業をデザインしていくことが求められます。正解だけを求めることなく、異なった友達の意見を大切にする授業を行うことは、これからの時代を生きる子供には大切な学びとなります。



【ブレストとKJ法を取り入れた職員研修①】